

小さなエコの大きな意味と信仰

すべてのいのちを守るために

吉川 まみ
上智大学教授

② 地球の掟から見るライフスタイル問題

人間の振る舞いの問題

としての環境問題

「環境問題を知るために問題に目を向ける」と「環境問題に取り組むために問題に目を向ける」と、これらは似ているように感じられます。理屈っぽく感じられたかもしれませんが、ほんの少しでも意識啓発・環境教育実践に携わった経験がある方々なら、これらが異なることを誰もが痛感されたいはずですよ。

前者は、問題の因果関係などを科学的、客観的に知ることが中心になります。後者は、環境問題の客観的な知識は必須であるとしても、狙いは私たちがエコロジカルに変わることです。残念ながら人間は、知識を得たからといって、必ずしも行動を変化させられるわけではないことは、環境教育の研究によって明らかになってきました。

ですから、生態系の上に生じる狭い意味での環境問題だけでなく

く、そこに映し出される人間の振る舞いの問題に目を向けねばなりません。人間の問題についての知識から、さらに自分自身がエコ実践へと動くためには、まずは、「私たちの」ではなく、「私の」何が問題なのかという回心のためのまなざしが求められます。これが、いわゆる「自分事化」という意識啓発の重要課題です。

ライフスタイルを起点に

地球環境問題を見る

他人事から自分事にまなざしを向けるために大切なキーワードの一つが「ライフスタイル」です。教皇フランシスコは常々ライフスタイルの転換を呼びかけられています。『ライフスタイル』という語が24回も登場します。

「ライフスタイル」とは、例えば、朝起きて、顔を洗って歯磨きして、洗濯・掃除・炊事…など日常生活空間で展開されている日々のルーティンから成る個々人の生

活様式のことです。特別な非日常の事柄を指す語ではありません。興味深いことに、ライフスタイルを構成する日常の衣食住それぞれ個々の行為には、一定のパターンや価値観が反映されています。また個人的な生活様式とはいえ、そこに社会的な次元にコミット(関与)する正直さや勇気、責任も表れるものです。

ですから、環境問題を見て何が原因かと考えるだけでなく、自分のライフスタイルの日々の当たり

前のルーティンを起点に、それが地球環境にどんな影響をもたらしているかという、環境問題に対する逆方向からのまなざしが、有効なエコ実践のヒントを得ていくためにとても重要なのです。

問題のない環境と

地球の掟

ところで、環境問題というのは身近な言葉ですが、「問題」だと言っただけでは、本来は「問題のない環境」が前提にあるはずなのに、なかなか私たちはそのことを考えようとしません。

本来、私たち人間、社会、自然とそれぞれの関わりがどうあるべきか、「問題のない環境」や、「価値の部分」を常に思い起こしてい

なければ、問題が誰の目にも明らかになるまで問題に気が付きにくいはずです。本来の自然の価値や「問題のない環境」を支える地球の掟とはどのようなものなのでしょうか？

もつとも自然の本来の姿を知ろうとして、結局分かるのは「私たちは自然を何も知らない・知り得ない」ということかもしれません。知らないことを知っていることとはかけがえのない知の一つでもあります。自然の掟というのは大きなテーマですが、それでも、一般的に、地球上に存在するあらゆる物質が「循環」していることは一つの自然の掟として理解されています。地球には一つの大きな循環の中での水循環、大気循環、炭素循環があり、例えば水という物質がいつまでもなくなるように、始まりと終わりを永続的に繰り返しながら互いに循環し合っていることは分かっています。

この循環という掟を傷つける典型的な行為が「汚染・ごみ」です。もともとこの地球上に人類が登場するまでごみ・汚染物質など存在しませんでした。人類は科学技術を発達させる中で、自然界では循環させられないものを作り出し、排出し続けています。いま、気候変動・温暖化問題が

掟破りの

汚染・ごみ問題と公害

環境問題の代名詞のようになりました。しかし、その直接的な原因である温室効果ガスの排出量やエネルギー源に関わらず、日本では半世紀前から既に「公害」が甚大な被害をもたらした。その中心が汚染・ごみ問題であったことを思い起こせば、環境問題の根本には公害のような地球の掟に反する人間の振る舞いがあることに気が付きます。

高度経済成長期から半世紀、社会構造の変化に連れて、産業公害に対して日常生活に起因する「生活型公害」が拡大しています。実際、いまの日本の水質汚染の原因の約60%は一般家庭からの生活排水です。

私たちは、衣食住生活を通じて常に何かを消費しながら生きていますから、ライフスタイルの中の「ごみ」は、自分が何に価値を置いて、何を価値なしと見なすかをそのまま映し出します。

それは、本質的には被造物と自分との関わりをも反映すると言えるのでしよう。自然を汚染し、使えるものをごみ扱いする使い捨て文化に現れる被造物との関わりは、その造り主である創造主との関わりとの不調和をも意味し、これが、教皇が回勅で、環境問題を「汚染、廃棄物、使い捨て文化」から語り始めた理由の一つではないでしょうか。